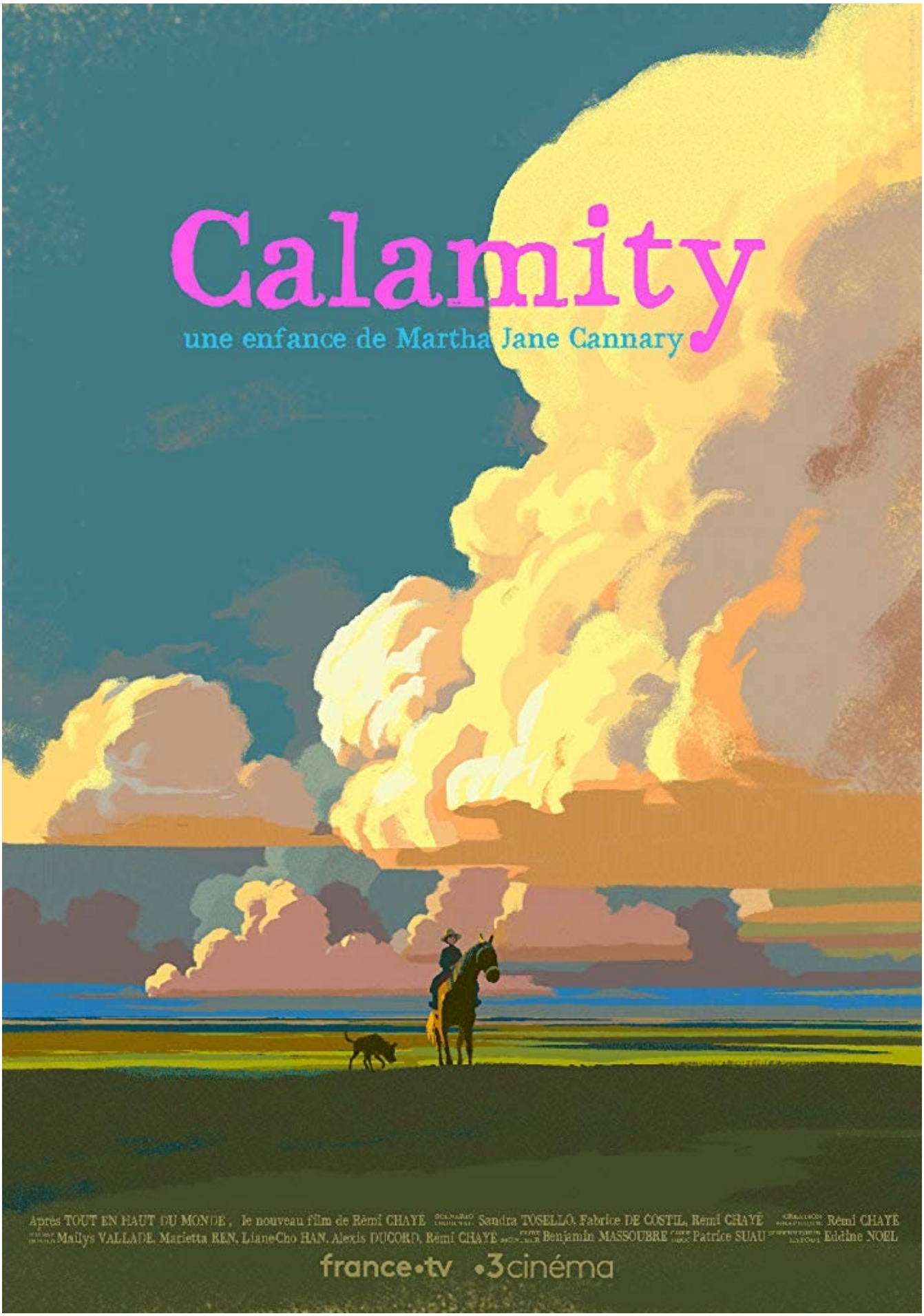

Calamity
une enfance de Martha Jane Cannary
Après TOUT EN HAUT DU MONDE , le nouveau film de Rémi CHAYE
Sandra TOSELLO, Fabrice DE COSTIL, Rémi CHAYE
Rémi CHAYE
Mallys VALLADE, Marietta REN, LianeCho HAN, Alexis DUCORD, Rémi CHAYE
Benjamin MASSOUBRE
Patrice SUAU
Eddine NOEL
france•tv
•3cinéma

作品情報

タイトル：カラミティ
原題：une enfance de Martha Jane Cannary
英語題名：Calamity, a childhood of Martha Jane Cannary

監督：Rémi Chayé　レミ・シャイエ
制作スタジオ　Maybe Movies　（フランス）/nørlum　（デンマーク）
製作費：8 百万ユーロ（9 億 6 千万円）
World Premia：
2020 年 6 月　アヌシー国際アニメーション映画祭　にて最高賞クリスタル賞受賞

＜アヌシー国際アニメーション映画祭＞
アヌシー国際アニメーション映画祭は、1960 年にカンヌ国際映画祭からアニメーション部門を独立して創設された、アニメーション映画祭としては最も歴史がある世界最大規模のアニメーション映画祭です。
日本の作品としては、1993 年に宮崎駿監督『紅の豚』、1995 年に高畑勲監督『平成狸合戦ぽんぽこ』が長編部門グランプリをそれぞれ受賞しています。近年では湯浅政明監督『夜明けを告げるルーのうた』の長編部門クリスタル賞が記憶に新しい。（注）グランプリ名称が近年クリスタル賞に変わっています。
（２０２０/フランス・デンマーク/シネマスコープ/5,1ch/フランス語）※日本語吹替制作予定

＜概要＞
『カラミティ』は、2019 年ようやく日本公開され、その輪郭線のない美術的な画風と、リアルな表現で話題を集めたのフランス・デンマーク産アニメ『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』の監督であるレミ・シャイエ監督による最新作です。
２０２０年春、コロナ禍を回避して完成した本作は、アニメーションの最高峰の映画祭であるアヌシー国際映画祭にて見事クリスタル賞(グランプリ)を受賞しています。アヌシーにてワールド・プレミア上映後、各国映画祭を巡回、本国フランスで 500 館を超える劇場にて大規模公開されました。制作スタジオとスタッフも前作『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』の主要メンバーが再集結しており、早くも各国から期待が高まっている作品です。
日本では、『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』と同じく、リスキットの配給により、2020 年 12 月に開催の横浜フランス映画祭にて字幕版をジャパン・プレミア上映後、2021 年夏に公開予定です。

＜あらすじ＞

『カラミティ』は、西部開拓史上、初の女性ガンマンと知られるマーサ・ジェーン・キャナリーの子供時代（１２歳）の物語です。マーサは家族とともに大規模なコンボイ（旅団）で西に向けて旅を続けていますが、旅の途中、父親が暴れ馬で負傷し、マーサが家長として幼い兄弟を含め、家族を守らなければならない立場になってしまいます。普通の少女であったマーサは、乗馬も、馬車の運転も経験がありません。そんなマーサは、少女であることの制約に苛立ち、家族の世話をする義務をよりよく果たすために少年として服を着ることを決心します。女性は女性らしくという時代にあって、マーサの生き方は、古い慣習を大事にする旅団の面々と軋轢を生みます。更にマーサを野獣からの危険から救ってくれた中尉をコンボイに引き入れたことで、盗みの共犯の疑いまでかけられてしまいます。そして・・・。

＜みどころ＞

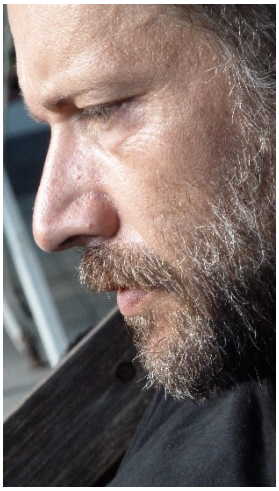
主人公が北極への旅に出て船が行方不明になった祖父を見つけるために乗り出す 14 歳のロシア人少女である『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』と同様に、『カラミティ』も大胆かつ勇気のある女性ヒーローの成長譚です。主人公の少女はまた、周りの大人たちに影響を与え、その大人たちもいつしか少女とともに、成長するという物語です。『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』は文部科学省、一般劇映画部門にて少年、青年、成人、家族の４対象にて選定をうけているように、レミ・シャイエ監督の作品は老若男女あらゆる世代にアッピールできる特徴があります。この広いターゲットは、いわばジブリの持つターゲット層と重なる層であり、本作品もまた、良質な日本語吹替え版を用意することで、より多くのファミリー層に訴求します。

境界線のない独特な手法の作風は、あたかも美しい絵画をみているようだ、と評価が高く、その手法は、新作『カラミティ』で、更に磨きがかかっています。神アニメーター　井上俊之氏をはじめ、国内の多くのアニメーター、漫画家たちが、その作風を絶賛しています。本作は“Art Book”の出版も予定されており、美術・アート面の訴求もぬかりありません。

また、日本では、『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』の公開が 2019 年で（注）、好評であった興行を受けて、DVD、配信・TV といった二次展開を 2020 年後半から展開しています。（2020 年９月 wowow にて放映、12 月 “三鷹の森ジブリ美術館ライブラリー”として　DVD/ブルーレイがディズニーから発売決定！！

（注：アヌシー国際映画祭観客賞、東京アニメアワード・グランプリ受賞後、故・高畑監督が日本公開を切望されていながら、なかなか公開が実現しなかったが、リスキットにより４年越しで２０１９年に日本公開となった。）

レミ・シャイエ監督



芸術学校でデッサンを学んだ後、複数のアニメのストーリーボード、レイアウト、特殊効果を担当。そしてフィリップ・ ルクレルク監督の「The.Rain.Children（仏原題 Les.enfants.de.la.pluie）」といった長編作品のレイアウト班に加わった。 その後は監修のためアジアに数度渡るが、2003 年にはアニメーション映画学校ラ・プードリエールに入り、短編映画「Le. Cheval.Rouge」、「Grand-Père」（Canal.J）、「Eaux-Fortes」の三作品を制作する。　その後はトム・ムーア監督の『ブレンダンとケルズの秘密』の助監督兼ストーリーボードを担当するなど経験を積み、 ついに『ロング・ウェイ・ノース 地球のてっぺん』の監督兼原画家となる。最新作は『カラミティ』。開拓時代 のアメリカ初の女性ガンマンとして知られるカラミティ・ジェーンの少女時代を描く本作は 2020 年アヌシー国際アニメーション映画祭　長編アニメーション部門　クリスタル賞(グランプリ)受賞。

国内公開：2021 年夏以降を想定しています

フランス側は、『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』をロングランヒットさせ、多くのファンアートを獲得するなど日本国内配給のリスキットのプロモーションの手腕を高く評価しており、アヌシーでの本格セールスを前に、世界３番手（１，２番手は制作投資国のフランス、デンマーク）として契約が成立しました。（『ロング・ウェイ・ノース』は世界２９か国目の契約）

共同事業パートナー　　リスキット/キャトルステラ/ホリプロ・インターナショナル　ほかを予定

レミ・シャイエ監督作品の魅力
――平面と色彩の調和が織りなす美しき世界――

叶 精二（映像研究家）

●実在の人物・事件から架空の物語を創作する

カラミティ（疫病神）・ジェーン。西部開拓時代のアメリカで活躍した自由奔放な女性ガンマン。その容姿は束ねた金髪に碧眼で、アングロサクソン系の美女に見える。こうしたイメージは、ミュージカル映画『カラミティ・ジェーン』（1953 年）でドリス・デイが彼女を演じた頃から変わらない。『トイ・ストーリー』シリーズに登場するカウガール人形「ジェシー」もカラミティがモデルらしく、やはり金髪碧眼だ。

しかし、本作のヒロイン「マーサ・ジェーン・カナリー」のキャラクターデザインは全く違う。茶色の髪に太い眉毛、丸い鼻は、どちらかと言えばヒスパニック系に見える。残された写真を見る限り、従来のイメージより本作の方が本人に近い。実在の場所・人物・事件を基にオリジナルを創作するレミ・シャイエ監督のスタイルは、前作『ロング・ウェイ・ノース 地球のてっぺん』と共通する。

『ロング・ウェイ・ノース』の起点は、脚本家クレール・パオッティ（Claire Paoletti）の発案による「祖父の汚名を注ぐために旅立つロシア貴族の少女の物語」であったと言う。シャイエ監督とパオッティは、イギリスの冒険家アーネスト・シャクルトンが率いた「エンデュアランス号の南極漂流」（1914～1916 年）をヒントに舞台を「Tout en haut du monde（地球のてっぺん）」である北極に改変。脚本にパトリシア・ヴァレックス（Patricia Valeix）、ファブリス・ドゥ・コスティル(Fabrice de Costil)を加え、砕氷船の遭難と奇跡的帰還という大胆かつ劇的なシナリオへと再構築した。

一方、本作のサブタイトルは「une enfance de Martha Jane Cannary（マーサ・ジェーン・カナリーの子供時代）」。カラミティ本人は自己演出の虚言癖があり真偽不明の経歴が多く、特に幼少期は謎が多い。シャイエ監督は脚本のサンドラ・トセロ(Sandra Tosello)、ファブリス・ドゥ・コスティル(Fabrice de Costil)と伝記『The Life and Legends of Calamity Jane』（Richard W.Etulain 著、日本語版なし）を基に史実を調査。カラミティは「幼少期に一家でミズーリ州からモンタナ州まで楽しい旅をした」と語っているが、その詳細は分かっていない。そこで年代を 1863 年（11 歳）とし、舞台をワイオミング州（ホットスプリング郡）からアイダホ州へ向かう「オレゴン・トレイル」に設定。母の死後、父が旅団の馬車隊に加わり移転先まで旅をする物語とした。当時は南北戦争の最中である。サムソン少尉や大佐が属する「第 3 騎兵隊」はブルーの軍服から北軍と思われる。

前作との共通点は設定や舞台だけではない。男性社会の中で苦しみながら働き、めげずに旅を続ける中で自立し、やがてリーダーリップを発揮するヒロインの生き様。多数の登場人物がそれぞれ事情を抱えており、打倒すべき悪人が存在しないという民衆感。健気に寄り添う愛らしい犬の存在。前作の白熊、本作のピューマ・熊・蛇などあくまでリアルな生物描写。どれもが、信頼・勇気・決断といった普遍的なテーマを構成する重要な要素となっている。

●簡素なキャラクターと空間の絵画的色彩設計

シャイエ監督作品の最大の特徴は、色面で塗り分けられたキャラクターと背景が一体となった画面の美しさである。キャラクターに輪郭線はなく、色面の顔に眼・鼻・口などの極めて少ない線を上描きした簡素な造形だ。線描の過密化によって質感や装飾性を高めようという発想とは真逆のスタイルだ。元々『ロング・ウェイ・ノース』のために開発された様式であったが、本作では一層の洗練と同時に照明・配色などに複雑な進化が見られる。前作でも作画監督を務めたリアン・チョー・ハン（Liane-Cho Han）による的確かつ繊細なアニメーションと高低差を活かしたレイアウトが作品の基礎を支えている。

とりわけ自然の風景描写は圧巻である。ピンクやパープルで陰影を施された雲、ブルー・グレー・グリーンの混在する平原の草むら、青く明るい夜空。それらの空間は平面的でありながら深い広がりを持ち、湿度や匂いまで感じられそうだ。透明な装いを捨て、潔く水色に塗られた川の水飛沫からちゃんと冷たさが伝わって来る。情報過多の写実的 3DCG の VR 映像とは根本的に異なる、簡潔で調和の取れた色面から喚起される「感覚的臨場感」がそこに在る。

前作に続き色彩監督を務めたパトリス・スュオー （Patrice Suau)は、後期印象派を代表する画家ポール・ゴーギャンとその教えを起点として展開した「ナビ（予言者）派」、その後継運動である「フォービズム（野獣派）」の色調を参考にしたと言う。19 世紀末にヨーロッパで始まったこれらの新たな絵画運動は、人の心理や感覚を写実を廃した色彩で表現しようと試みた。そして、それらの運動は浮世絵を代表とするジャポニスムの強い影響を受けていた。その遺伝子を受け継ぎ、未だ線描の漫画や「アニメ」を愛する我々日本人には、本作に親和性を感じる根拠がある筈だ。

近年 EU 諸国を中心に、幾多の革新的長編アニメーションが生まれている。『ディリリとパリの時間旅行』のミッシェル・オスロ監督も、『ウルフウォーカー』のトム・ムーア監督も、『手をなくした少女』のセバスチャン・ローデンバック監督も、そしてシャイエ監督とそのスタッフも、手描きにこだわる日本（特に宮崎駿・高畑勲両監督）の影響を受け、写実とは異なる作画様式の導入に挑んで来た。それらはアニメーションの美術的価値を押し上げる新たなムーヴメントと言い換えても良い。1 世紀以上の時を隔て、写実から心象へと転換した美術史が繰り返されているように思えてならない。

1890 年、ナビ派の代表的画家・理論家であるモーリス・ドニは論文『新伝統主義の定義』にこう記した。

「絵画が、軍馬や裸婦や何らかの逸話である以前に、本質的に、ある順序で集められた色彩で覆われた平坦な表面であることを、思い起こすべきである」

シャイエ監督の作品群からは、ドニの提言に通じる誇りと信念を感じる。美しい色彩で塗り分けられた豊かな空間。その中に溶け込み、存分に躍動するキャラクターたち。眼に優しい平面の絵がスクリーンを通じて語りかけて来る。その心地よさと驚きこそ、2D アニメーションの本質的魅力であり、揺るぎない優位性である。